

令和 4 年 8 月 26 日現在

機関番号：34605

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K20868

研究課題名(和文) 在日コリアン超高齢者・百寿者における民族的ソーシャル・キャピタルの開発と検証

研究課題名(英文) Development and verification of ethnic social capital in Korean oldest old and centenarian living in Japan

研究代表者

文 鐘聲 (MOON, Jong-Seong)

畿央大学・健康科学部・准教授

研究者番号：50460960

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)： ベースライン調査における対象者は、調査開始時平均年齢 87.7 ± 6.2 歳であった。また、上記のベースライン調査では半数の対象者に差別を受けた経験があると回答した。被差別経験の有無と主観的健康感には関連のある可能性が示唆された。

ソーシャル・キャピタルについては、日本人との付き合いよりも在日コリアン同士の付き合いが多い傾向にあることが明らかになった。特に50歳代までに顕著であった。60歳代以降は、両者とも徐々に近所付き合いが少なくなっていた。また、差別を受けていた人たちは1945年以前において日本人との付き合いの程度が受けていない人に比べて低いことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、在日コリアン超高齢者・百寿者のコホートを発進させることができた。今後、継続的に調査を行うことによって、民族的なソーシャル・キャピタルの指標が明確になる可能性がある。また、ベースライン調査における解析において、「差別」が新たなキーワードとして浮上した。被差別体験の有無が高齢期の健康に影響を及ぼすかどうかを、コホートデータによって明らかにすることが可能となる。

これらのことは、日本の超高齢者・百寿者研究において極めて有意義であると考えられる。また、在日コリアン超高齢者・百寿者の研究は、今後増加していく他の外国人高齢者研究の基盤となる可能性が非常に高いと考えられる。

研究成果の概要(英文)： The subjects in the baseline survey had an average age of 87.7 ± 6.2 years at the start of the survey. In the above baseline survey, half of the subjects answered that they had been discriminated against. It was suggested that there may be a relationship between the presence or absence of discrimination and subjective health.

Regarding social capital, there were more relationships between Koreans living in Japan than with Japanese people. It was especially noticeable by the age of 50s. After their 60s, both of them gradually became less familiar with their neighbors.

研究分野：公衆衛生学

キーワード：在日コリアン高齢者 超高齢者 百寿者 ソーシャル・キャピタル 差別

1. 研究開始当初の背景

日本における在留外国人は2015年6月末現在、2,172,892人でそのうち最も多いのは中国で656,403人、次いで韓国・朝鮮が497,707人である。また、老年人口割合(高齢化率)は中国籍者が1.9%に対し韓国・朝鮮籍者23.5%であり、他の在留外国人の中でも韓国・朝鮮籍者が最も高く、日本の高齢化に肉薄している。また、韓国の12.6%(2014年)と比べても非常に高い割合である。在日外国人高齢者の健康問題を考える上で、在日コリアン高齢者の研究は最も重要度が高いと言える。

これまで、在日コリアン高齢者に関する先行研究は少なく、日本人との比較研究は皆無であった。そこで在日コリアンが最も多く居住する地域において、在日コリアン高齢者と日本人高齢者の日常生活動作(ADL)、抑うつ傾向、QOL(生活の質)を、高齢者総合機能評価の手法を用いて比較した。その中で、在日コリアンと日本人高齢者において就学年数がADLを規定し、抑うつおよび主観的幸福感は諸因子で調整後も民族差があったことを明らかにした。これは、国内における社会疫学分野において社会経済的地位(SES: Socio-Economic Status)と「民族」を考慮した数少ない研究である。しかしながら、超高齢者に限定した研究はまだなされていない。

また、在日コリアン集住地域における介護保険サービスを利用している在日コリアン高齢者に関する研究はこれまで散見されたが、SESと疾病やADLを関連付けて解析されたものはなかった。

これまでの研究の限界は、縦断的なものではないため、社会経済的地位(SES)が在日コリアンの健康に長期的に及ぼす原因がわかりにくい点、②集住地域であるとはいえない地域に関するものであるため、対象者の偏りが懸念されるという点であった。

在日コリアン高齢者、特に戦前・戦中、あるいは戦後混乱期に朝鮮半島から渡日した1世は少なくなった。2015年6月末現在、80歳以上の在日コリアン高齢者は25,809人(韓国・朝鮮籍者全体の5.2%)であるが、百寿者数などは在留外国人統計、国勢調査等では明らかになっていない(在留外国人統計では外国籍者は「80歳以上」で一括表示されており、本研究では80歳以上を超高齢者とした)。

SES、ADL、QOLが不利な状況にある在日コリアン高齢者においても、超高齢者、百寿者は存在している。これらは、在日コリアンにとって「民族的つながり」が長寿の要因の一つであり、超高齢者・百寿者の縦断的な調査によって明らかにすることができる可能性を示唆している。在日コリアン百寿者は非常に少なく、渡日史を含めた本国及び日本での健康と生活状況、SCを早急に解析する必要がある。また、在日コリアン百寿者・超高齢者の渡日史は、戦前が多く、その語りは非常に貴重なものであり、質的に分析し可能な限りアーカイブ化しておく必要がある。

2. 研究の目的

(1)すでに収集したデータを用いて、①地域在住在日コリアン超高齢者と日本人超高齢者の社会経済的状態(SES)、健康状態、QOLの相違を明らかにすること、②介護老人保健施設を利用する在日コリアン要介護高齢者の特徴と、教育年数及び識字能力とADLの関連を明らかにすること

(2)上記による知見を鑑み、在日コリアン百寿者・超高齢者コホートを構築し、在日コリアン百寿者・超高齢者に対し渡日歴、民族的つながり、ソーシャル・キャピタル、基本属性、身体機能、認知機能、QOL等を測定することによって、在日コリアン百寿者・超高齢者において民族的つながりを踏まえた新たなソーシャル・キャピタルの新たな指標を開発、検証すること

以上を本研究課題の目的とした。

3. 研究の方法

(1)すでに収集したデータによる解析

①高齢者総合機能評価の手法を用いた在日コリアン高齢者と日本人高齢者の比較研究における、超高齢者のみに限定したサブ解析

在日コリアン集住地区に居住する地域在住超高齢者(80歳以上)の104人(在日コリアン53人、日本人51人)を本研究の分析対象とした。調査内容は、基本属性として在日コリアン/日本人の別、年齢、性別、社会的経済的指標、社会的状況であった。また既往歴、基本的ADL、老研式活動能力指標、抑うつ(GDS15:6点以上を「抑うつ傾向」、10点以上を「抑うつ」とした)、Visual Analogue Scaleを用いたQOL(主観的健康感、気分、家族関係の満足度、友人関係の満足度、経済的満足度、生活満足度、主観的幸福感)であった。各項目について在日コリアンと日本人とをt検定あるいは χ^2 検定にて比較した。

②介護保険施設を利用する在日コリアン高齢者におけるSES、ADLに関連に関する解析

介護老人保健施設を利用する在日コリアン高齢者104人を非識字群(23人)と識字群(81人)の2群に分け、その特徴をt検定、Fisherの直接確率検定にて比較した。さらに、上記

において有意だった変数を独立変数の候補とし、多重共線性に注意しながら独立変数を選択し、重回帰分析を行った。

(2) 在日コリアン百寿者・超高齢者コホートの構築とソーシャル・キャピタル指標の開発

①研究方法

質問紙を用いた半構造的面接

②調査対象者

在日コリアン百寿者及び、在日コリアン超高齢者（80歳以上）とした。両者ともに全国に対象者が点在しており、かつ応答が可能な高齢者を探すという観点から、在日コリアン医療従事者・介護従事者・民族団体等を介したスノーボール・サンプリングとした。対象人数は、百寿者10人、超高齢者200人とした。

調査を行う中で、最集住地におけるサンプリングが不足していたため、追加調査を計画中に新型コロナウイルス感染症の影響を受けることとなり、介護保険事業所における調査が長期にわたり中断した。研究課題の延長申請を行い、追加調査の機会を窺っていたが、新型コロナウイルス感染症の影響は介護保険事業所ではかなり大きく、追加調査を断念することとなった。そのため、解析そのものが大幅に遅れている状況である。

③調査内容

基本属性、身体状況（疾病、ADL）、渡日史（渡日時の状況及び本国・日本での生活、民族的つながり）、ソーシャル・キャピタル、精神的健康、抑うつ、QOL、SOC、認知機能とした。

4. 研究成果

(1)

①地域在住在日コリアン超高齢者と日本人超高齢者の比較

基本属性、社会経済的状态に関しては、年齢（在日コリアン84.6±3.3歳、日本人84.7±4.2歳）や性比、婚姻状態、独居、飲酒、喫煙について有意な差は認められなかった、年金受給者の割合は在日コリアン26.4%、日本人90.2%と、在日コリアンの方が有意に低かったが生活保護受給者の割合に有意な差はなかった。また、就学年数は在日コリアン2.1±3.2年、日本人が8.3±1.9年と顕著に差があり、とりわけ在日コリアン女性では1.6年と短かった。毎日の活動、生きがい、既往歴については有意な差は認められなかったが、転倒歴にのみ在日コリアンが有意に高いという結果となった。ADLに差は見られなかったが、老研式活動能力指標は下位尺度も含めて在日コリアンが有意に低かった。抑うつは在日コリアンの方がGDSスコア、抑うつ者の割合が高く、QOLは全ての項目において在日コリアンの方が低い値となった。在日コリアン超高齢者は渡日するにあたり日本の植民地化や差別による影響を受けており、識字率の低さや貧困が高齢期の抑うつ、QOLの低下の要因と考えられた。

②介護保険施設を利用する在日コリアン高齢者におけるSES、ADLに関連に関する解析

分析対象者の年齢は85.1±7.8歳、女性が88人（84.6%）、1世が87人（83.7%）を占めていた。教育年数は0年が最も多く35人（39.3%）、1か月以上2年以下が20人（22.5%）、2年超4年以下が17人（16.3%）、4年超が17人（16.3%）であった。経済的指標として年金受給者は27人（27.3%）であり、生活保護受給者は39人（37.5%）であった。在日コリアン要介護高齢者は社会経済的地位が低く、非識字群と識字群においては年齢、性別、教育年数、高血圧者の割合、認知機能、ADLに相違があった。重回帰分析の結果、非識字は有意な変数であったが認知機能を加えたモデルでは非識字の有意性は消失した。在日コリアン集住地の老人保健施設を利用する在日コリアン要介護高齢者において、教育年数及び識字能力とADL、認知機能は複合的な関連がある可能性が示唆された。

(2) 在日コリアン百寿者・超高齢者コホートの構築とソーシャル・キャピタル指標の開発

ベースライン調査における対象者は、男性26人、女性169人であり調査開始時平均年齢87.7±6.2歳であった。また、上記のベースライン調査では半数の対象者に差別を受けた経験があると回答した。男女別では男性で65%、女性で48%であった。被差別経験の有無と年齢には有意な差があるとはいえなかった。また、被差別の有無によって現在の幸福感および経済的満足度が異なることはなかったが、主観的健康感については差別を受けた方が低い可能性が示唆された。

ソーシャル・キャピタルについては、日本人との付き合いよりも在日コリアン同士の付き合いが多い傾向にあることが明らかになった。特に50歳代までに顕著であった。60歳代以降は、両者とも徐々に近所付き合いが少なくなっており、現在は「あいさつ程度の最低限のつきあい」か「全く近所付き合いをしていない」割合が両者とも多かった。また、差別を受けていた人たちは1945年以前において日本人との付き合いの程度が受けていない人に比べて低いことが明らかとなった。差別を受けた経験があることによって日本人社会との付き合いが減った（拒絶した）可能性が考えられる。現段階では、明確な民族的ソーシャル・キャピタルの指標を見出すことはで

きなかった。

本研究によって、在日コリアン超高齢者・百寿者のコホートを発進させることができた。今後、継続的に調査を行うことによって、民族的なソーシャル・キャピタルの指標が明確になる可能性がある。また、ベースライン調査における解析において、「差別」が新たなキーワードとして浮上した。被差別体験の有無が高齢期の健康に影響を及ぼすかどうかを、コホートデータによって明らかにすることが可能となる。

これらのことは、日本の超高齢者・百寿者研究において極めて有意義であると考えられる。また、在日コリアン超高齢者・百寿者の研究は、今後増加していく他の外国人高齢者研究の基盤となる可能性が非常に高いと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 文鐘聲	4. 巻 5
2. 論文標題 介護老人保健施設を利用する在日コリアン要介護高齢者の教育年数及び識字能力とADLとの関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Global Korean Research	6. 最初と最後の頁 93-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 文鐘聲	4. 巻 39-1
2. 論文標題 在日コリアン超高齢者の社会経済的状況と健康、QOL	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 老年社会科学	6. 最初と最後の頁 66-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 文鐘聲
2. 発表標題 在日外国人高齢者における生きがいに関連する要因 在日コリアンと日本人の比較
3. 学会等名 第61回日本老年社会科学会大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------